

生形 章先生(日本道徳科教育学会理事・元全小道研会長・元教育庁指導部道徳担当指導主事)から「道徳科の現状」についてのご所感をいただいたので、ご本人の許可を得て掲載させていただきました。 ご精読ください。

H30.10.6 後藤

H30.10.5 @Ubukata

道徳科が始まって、強く思うこと

道徳科が始まって道徳授業の「量的変化」は多くの小学校で起きている。中学校でも起こると思う。しかし、道徳科設立のもう一つのねらいである道徳授業の「質的变化」は難しい状況にあり、以下の点においては「道徳の時間」よりむしろ悪くなっている。

○「死んだ」道徳科授業になったのでは

① 教材選択

ねらいとする道徳的価値と児童の実態から、一番ふさわしい「教材」をいろいろ苦労して選び、授業をすることが少なくなった。(教科書の教材を順番にこなしていく先生)

② 教材提示

児童の発達段階等に応じて、教材提示の仕方を様々工夫して、児童の「自我関与」を促す授業をすることが少なくなった。(教科書をただ読むだけの先生)

③ 発問構成

どの場面でどんな発問をしたらよいか、教材分析をしっかりと行い、中心発問、基本発問を吟味する授業をすることが少なくなった。(教師用指導書通り授業する先生)

教材選択や教材提示は道徳科授業の「命」であり、これで授業の半分以上は決まってしまう。また、発問構成は、自分の学級の実態に合わせて「こう発問したら、Aさんは、Bさんはこう発言するだろう」と考えながら行うもの。これも道徳科授業の「命」である。

この①～③を軽視した道徳科授業は命のない「死んだ」道徳科授業だと思う。

○ 道徳科の評価は「何」のために

道徳科の評価について、「通知票に道徳科の評価を設けない決定をした教育委員会」という新聞記事にびっくり。道徳科の評価の目的の一つに、道徳科授業の「質的变化」を図るためとあるではないか？

道徳科授業において、先生が自分の学級の児童の「学習状況を把握し、道徳性に係る成長の様子をみとる」ためには、毎回自分の授業を必ず振り返らなければならない。

全ての先生が児童の成長のために自分の道徳科授業を振り返り、より質の高い授業を目指していくことで、授業の「質的改善」が図られて行くのである。

道徳科の評価は「通知票にどう書いたらよいか」ではなく、「通知票に書くことがたくさんある」道徳授業をどのように実践するかが大切だと思う。